

雲晴

春彼岸号

「雲晴」第三十四号

令和二年三月一日発行

貞林院 瑞正寺

〒125-0041 東京都葛飾区東金町五丁目四六―五
電話(〇三)三六二七―三四一五
FAX(〇三)五六九九―五九一五

釈尊のことば

法句經に学ぶ 4

神田寺住職 友松浩志

ひとの生を

うくるはかたく

やがて死すべきものの

いま生命あるはありがたし

正法を

耳にするはかたく

諸仏の

世に出づるも

ありがたし

法句經 一八二

春のお彼岸の頃、木々が芽生え、花々が咲き、「生命の力」を目のあたりに見ることが出来る季節です。人の営みでも、新学期・新年度と新しい「生命の躍動」も感じることが出来る時です。

とはいえ、人はなかなか生命のありがたさを実感しないものです。毎日の生活に追われアツという間に時間が過ぎ、病気にでもならない限り、健康のありがたさにさえ気づきません。与えられた人生に文句を言い、平凡な毎日に退屈する。

それは、なんともつたいないことでしょう。時には静かに立ち止まって、「人」として生まれた幸せ、「人」として生きる意味を考えたいものです。多くの生命はただ生きること、食べることでその生命を終えていきます。

「人」は、生きることの意味を考えるおそれなく唯一の存在なのです。

宗教、とりわけ仏教の意味も、そこにあります。お釈迦様は「生きること」「老いること」「病気になること」「死ぬこと」の四つの苦しみの意味を考え、出家されたと言われます。与えられた生命をどう生き、生かすのか。お釈迦様の人生もまた、生きることの意味を問い続ける人生でした。「お経」に学ぶというのは、そうしたお釈迦様や弟子の方々の、問いや考えに学ぶということなのです。

唱歌のふるさと 童謡のくに ⑤

著：佐山哲郎

金太郎、一寸法師

明治六年、鳥取県に生まれた田村虎蔵は、東京音楽学校初代校長、高遠藩士伊沢修二より二十二下である。

伊沢は、日本に音楽教育が必要であることを痛感し、何人かの外国人教師とともに、いわば唱歌教育の枠組みを作った。

後発の田村虎蔵の仕事はその枠組みに魂を吹き込むことだったといえる。

「大黒さま」（大きな袋を肩にかけ）「金太郎」（まさかりかきつ

だ金太郎）「一寸法師」（指にたり

ない一寸法師）「花咲爺」（裏の畑でポチが鳴く）などなど。

読者はいくつ覚えているだろうか。これらの歌の作曲家が田村虎蔵である。

田村が音楽学校を卒業し、教壇に立った頃、伊沢の作った『小学唱歌集』は三冊

そこには、例えば「見渡せば」という題の曲。これは「むすんでひらいて」の旋律につけられた歌詞で、「見渡せば あおやなぎ

花桜 こきまぜて」とある。（神楽坂筑士八万に田村の顕彰碑あり）

完全に文語体である。

しかし明治の子供にも、この文語はすでに難解であった。

「わがかみの子」とは、「一番先に生まれた子」の意味で使っている。二番の歌詞に「わがなかの子」とあり、三番には「わがすえの子」とあるからである。三人の息子が出征してしまった、という詩の内容

容なのである。

田村は子供達から素朴な質問を受けるたびに、もっとわかりやすい言文一致の唱歌に拘った。

（神楽坂筑士八万に田村の顕彰碑あり）

法然上人の御生涯 ⑤

浄土宗を開くまで

前号で紹介したように、法然上人は、比叡山で源光上人・皇円阿闍梨のもとで修業された後、十八歳で叡空上人のもとに身を寄せました。叡空上人のいらした西塔黒谷はとても厳しい自然の中にあります。当時この場所には俗世間から離れて修業を志す者たちが集まって研鑽を積んでいました。何よりここには報恩蔵という建物があり、その中には「一切経」（仏教の典籍を集成したもの。「大蔵経」とも言う）

が揃っていました。現在もこの地には青龍寺というお寺があり、報恩蔵も復元されています。比叡山の本堂である根本中堂から徒歩で一時間半ほどかかる、わかりづらい所ですが機会がありましたら是非訪ねてみてください。法然上人は黒谷に身を寄せ、四十三歳で比叡山を出られるまでの二十五年間、ひたすら名声や利得を捨て、一途に迷いの世界を離れる道（さと）を求め、勉学・修行に励みました。その

一口法話



「随順仏教」

テレビや新聞に、毎日のように色々な犯罪が報道されており、一つ一つ内容を見ると、なぜそのようなことをしてしまうのかと思うことが多いです。

都市犯罪に悩んでいたアメリカで、以前「割れたガラスの理論」という理論が発表されました。大きな犯罪も一枚のガラスから始まるということです。例えば住む人のいなくなった建物のガラスが、いたずらで一枚割られます。それを放っておくと、これが誘い水となり、建物が荒廃してしまい、やがて、そうした建物が犯罪の温床となるといえるのです。つまり大きな犯罪というのは、たった一枚のガラスを放置することから始まるのです。

仏教の教えは廃悪修善、悪いことをせず善いことを修めるといふことです。こんな当たり前のことすら私たちはできないのです。また、自分

書の誘い

然上人は五回も読まれたのです。また時には比叡山を離れ、当時多くの人々が集まっていた嵯峨清涼寺のお釈迦様に参詣したり、他宗の高僧の方々を訪ね教えを求めたりもしました。

そんな法然上人は周りから「智慧第一の法然房」と讃えられるほどになりましたが、当人には求める道に出会えた実感はなく、涙ながらに「一切経」を読み続けました。そして、求道の日々に終止符が打たれる日がやってきます。それは中国の善導師の著書「観無量寿経疏」の一文を読んだ時のことでした。「一心に専ら弥陀の名号を念じて行住坐臥に、時節の久近を問わず、一念に捨てざる者、これを正定の業と



名づく。かの仏の願に順ずるが故に（一心に阿弥陀様のお名前を称え、何時でも何処でも何をしていても、阿弥陀様を片時も忘れないで念仏することが正しい行いです。なぜならば、お念仏は阿弥陀様の生きとし生けるものを救うというお誓いに基づいた行いだからです）

法然上人は三十余年にわたる精進の末に、ひたすら念仏を称えれば阿弥陀様がすべての人を救ってくださる教に出会ったのです。承安五年（一一七五）春、法然上人四十三歳の時のことでした。今日浄土宗ではこの年を以って開宗としています。

一寸筆頭三尺劍 盡是

安邦定國人

「一寸筆頭三尺劍

盡是安邦定國人」

故林 錦洞書

貞林院瑞正寺

住職 林 清方

楷書で書かれたこの作品は、先代林錦洞が八十四歳の時のものです。「一寸の筆頭三尺の劍、姿勢を語ります。何事にも真剣に向き合い、鍛え抜かれた強い意志の力が国を安定させるような礎を築く有能な人材を生み出す」と読みます。

僅か一寸の筆の穂先がまるで

な礎を築く有能な人材を生み出す

では気をつけていても悪縁に巻き込まれて罪を犯すこともあるかもしれないです。

法然上人は「善き地に善き種を蒔かんが如し、構えて善人にして、しかも念仏を修すべし。これを真に仏教に随う者というなり。」（御法語後編に一章）というお言葉を残されています。

私たちは、出来るだけ悪い縁を遠ざけ、善き縁を近づけなければなりません。一番善い縁とは、お念仏を称えて阿弥陀さまにお迎えいただき、苦しみ迷いの世界から西方極楽浄土に住生することです。善い縁が益々強くなるように、日々のお念仏に励みましょう。

（総本山知恩院布教師会ホームページより）

すと語っています。冬の寒さに耐えやがては緑鮮やかな葉を出し花咲かせる松竹梅「歳寒三友」の教えも同様です。先代は「一寸の筆頭に微塵の濁りも遅滞もあつてはならぬ」と記していますが、正に書家として書に向き合う気構えを感じさせるものと思われまふ。今の世の全てが便利になりコツコツ努力をすることが何か時代遅れのような風潮がありますが、今一度見直す必要があるかもしれませぬ。

春の彼岸法要のご案内

春の彼岸法要は次のとおり行いますので、お参りください。

三月二十日(金) 正午より

彼岸法要は中日の正午に先祖代々のご回向をいたします。

塔婆をご希望の方は、電話・ファックス・メール等にて寺までお申し込みください。

塔婆料 三千元
回向料 志納

護持会費について

本年より護持会費(寺への管理費)につきましては振り込みでも行えるようにいたしました。すでに正月号の寺報に振り込み用紙を同封いたしましたので、よろしく願います。なお従来のようにお寺に直接お持ち頂いても結構ですので、お参りの際にもお納めください。

彼岸法要、盆法要の際に納めて頂くこともできますが、施餓鬼法要については、施餓鬼料の受付で大変混み合いますので、本年より護持会費についての受付はいたしませんのでご理解の程

よろしく願います。

寺の護持会費については、毎年納める本山への課金、年に数回入る植木屋さんへの支払いなどに充てられます。

また浄土宗の記念事業などには宗や本山への寄付金の要請がありますので、これらに遣かわせていただきます。

なお修繕積立もしており、これまでも山門塀の建て替え、本堂屋上の防水工事等に役立てております。

今後とも趣旨ご理解のうえ護持会費についてのご協力をよろしく願います。

「総本山知恩院参拝旅行」

本年の十一月三十日〜十二月一日に浄土宗の総本山知恩院を参拝いたします。浄土宗をお開きになりました法然上人の八百年大遠忌の記念事業として国宝である御影堂の平成大修理が行なわれました。九年の歳月を経てこの春に完成するもので、屋根瓦が一新され、堂内の仏具も全て修復されています。



「九年振りに姿を見せた御影堂」

*写真は「華頂」より掲載

御影とは肖像の尊称であり、法然上人の御影を本尊として安置されているために御影堂と呼ばれています。知恩院山内の多くの伽藍の中で一番大きなお堂であるため「大殿」とも言われています。これまで数度の火災に見舞われ、現在の伽藍は寛永十八年(一六四一年)に徳川家光の命により再建されたものです。

これまで当山の団参では知恩院の「平成の山門大修理」落慶など何度か参拝しておりますが、数年振りの総本山参拝となりますので、檀家信徒におかれましては是非この機会にご参加されることをお勧めいたします。

団参の申込書と詳しい内容は四月にお施餓鬼のご案内に併せて送りますのでご覧ください。

施餓鬼法要のご案内

本年の施餓鬼法要は五月十四日(木)に厳修いたしますのでご予約下さい。

ご案内につきましては、あらためて四月に発送いたします。

なお本年より受付テントでは施餓鬼料のみの受付で、護持会費の受付はありませんのでご注意ください。